

くらしの 核心

第8回

コミュニケーション・キッチン

(取材協力：キッチン・バス工業会)

最近、シニアリフォームという言葉をよく耳にします。子育てが終わってお金に余裕ができた50～60歳くらいの人たちが、家のリフォームに踏み切るケースが増えているそうです。その柱の1つが“ワンルーム化”です。

ワンルーム化は文字通り、部屋を1つにしてしまうことで、高齢者に負担が大きい部屋の行き来を無くし、掃除をやりやすくするなど、老後生活を視野に入れた快適性向上の考え方だと言えます。

そもそも、日本の住宅は狭い空間をいかに上手く活用するかという観点で改良が進められてきました。その象徴というべき存在が台所です。いわゆるダイニング・キッチン（DK）という言葉が使われ始めたのは意外と古く、昭和30年頃のことだそうです。戦後、焼け野原となった日本がいの一番に着手したのが生活・社会基盤の整備で、その焦点の1つが住宅の供給でした。



昔懐かしい木製流し台と水瓶

旧建設省が10年サイクルの建設計画をつくり、日本住宅公団を立ち上げたのが昭和30年のことです。当時とはとにかくたくさんの住宅を一気に完成につくり上げることが最重要施策でしたから、部屋の間取りは画一化され、その中で、狭いスペースを有効に活用する仕組みとして“台所と食卓を1室に併存”させるダイニング・キッチン方式が採用された経緯があります。ちなみに、国の法律では台所がない建物はいかなる場合も住宅とは見なされないそうです。反面、お風呂はなくても住宅として立派に売り物になるそうで、多摩ニュータウンもできた当時は浴場のスペースこそ設け

られていましたが、湯槽は設置されていませんでした。今では考えられませんが、当時はそれが当たり前だったのです。

そう考えると、台所は居住空間の中でもとりわけ日本人に大切にされてきた部分だと言えます。そして、台所はたゆまず進化を続け、今や一時代を築いたセクショナルキッチンさえも過去に追いついてしまいそうな勢いです。それに取って代わって、主役に躍り出たのがシステムキッチンです。システムキッチンは、給排水のための水栓、コンロ、食洗器などの台所の機能を一体的に取り込んだ製品で、各パーツを組み合わせるタイプのセクショナルキッチンに比べ、継ぎ目（流しとコンロ台の継ぎ目など）が無いぶん掃除が楽で清潔感があり、設計の自由度を飛躍的に上げることにも成功しています。

「台所の進化とインフラの整備は表裏一体の関係にある」。そう話してくれたのは、日本の住宅事情を水回りの観点から長年見続けてきたキッチン・バス工業会の島崎喜和・常務理事です。特に、「(水道に比べて遅れていた)下水道の普及が進んだことがキッチンの進化を大きく後押しした」と振り返ってくれました。

先述したワンルーム化に代表されるように、住宅建築の分野は今、“空間設計”の思想を基調としています。そして居住者の傾向として、個人主義から、夫婦・親子の触れ合いを大切にする家族主義へと意識の変化が見られるそうです。内閣府は11月18日を「家族の日」と定めていますが、キッチン・バス工業会では11月2日を「キッチン・バスの日」と定め、内閣府と連携して「家庭文化のありようを家族で考えよう」と提唱しています。そのような動きを踏まえ、キッチン業界も大きく変わりました。

「以前はCADを使ってキッチンだけを書けばよかったのですが、今はそれでは仕事になりません。ユーザーの多くが空間設計を望んでいるからです」(島崎氏)。昔は給排水関係の工事は建築に任せきりで、水道の蛇口は壁に据え付けるのが当たり前。そんな時代でした。ですから、キッチンは自動的に壁向きに設けられ、主婦は黙々と台所仕事をこなしてきた観があります。けれど、今や調理も家族やお客さんと向かい合い、コミュニケーションをとりながら行う時代になりました。いわばキッチンは日陰の存在から、日向の存在へと変わったのです。業界ではこれを“コミュニ



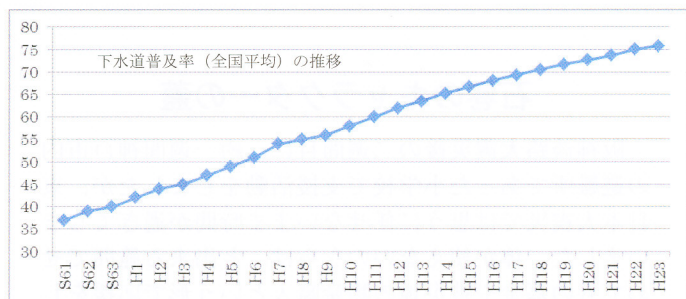
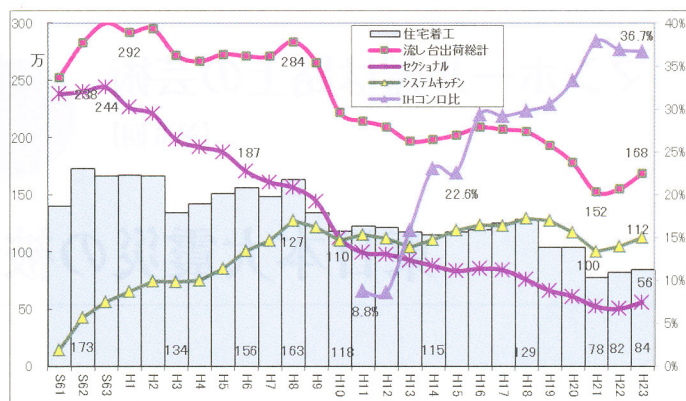
今はシステムキッチンが主流に

ケーション・キッチン”と呼ぶそうです。

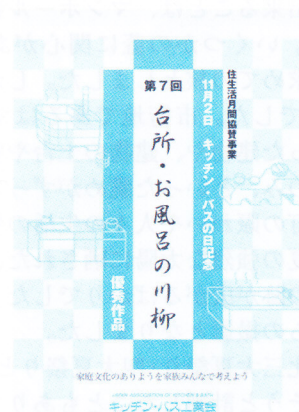
このような変化は、食を徹底的に楽しむ意識へ変換される一方、台所仕事の中で見せなくていい部分、あるいは見せたくない部分を「いかに隠すか」、その問題をことさら重要なものにした感があります。その代表的な例が洗い物です。例えば食事を終えた団らんのひとときに、ガチャガチャと音を立てて食器洗いをするのはあまり心地良いものではありません。ゲストがいればなおさらです。その点を考慮してシステムキッチンには食洗器が取り込まれたのですが、それによって家族がキッチンワークをシェアする効果生まれ、「よどみないコミュニケーションが図れる」とユーザーからの評価は高いようです。また、今の食洗器は前回使った水を再利用し、仕上げの時だけフレッシュな水を使う仕様になっているとのことで、「手洗いをするよりも水の使用量が少なく、家計にも優しい」とされています。ただし、水の使用量の抑制をめぐることは、目線の違いによって様々な議論が出ていることもまた事実です。

さて、システムキッチンが普及してきた現状について書いてきましたが、別掲のグラフをご覧ください。キッチン・バス工業会がまとめたキッチンの出荷台数の推移に下水道普及率を組み合わせたものです。ご覧いただくとお分かりの通り、下水道の普及率の上昇に連動するかのようにシステムキッチンの出荷台数が伸びてきたことが分かります。そして、下水道普及率が6割に達しようかという頃、セクショナルキッチンとシステムキッチンの立場が完全に逆転しました。

こう整理してみると、とかく“受け身”のイメージが強い下水道ですが、実は国民のライフスタイルの変化に少なからず影響を与えていることが分かります。「下水道ができたから、こういうことが可能になった」という事例は決して少なくないのです。今後、下水道界が様々な分野と連携することによって、従来は考え



グラフ：キッチン出荷台数と下水道普及率の推移



工業会主催の「台所・お風呂の川柳」

られなかった新たな社会貢献を果たしてくれるのではないかと期待感、こうしたところから湧き上がります。

キッチン・バス工業会はこれまで、電気・ガス、水栓・バルブ、石鹸・洗剤などの関連業界と足並みを揃え、製品の品質向上に努めてきたといいます。そして、今後については、各家庭で発生するエネルギーや資源の回収とその循環等についても検討を進めたい考えだそうです。そうした中、昨年は不幸にも大きな震災が東日本を襲い、多くの街が壊滅的な状況に追い込まれました。そのゼロからの再出発に当たり、給排水インフラ（エネルギー・資源の受供給インフラ）と居住の新たな関係の構築が大きな焦点になるのではないのでしょうか。その議論の活性化と1日も早い被災地の復興を望みます。

(筆者：中山 勲)